

## 韓国・鬱陵島現地調査報告：「国境」との関わりで

福原 裕二

### 1. はじめに

今年の春(2015年4月2日～5日)と夏(8月30日～9月1日)に調査のため、約1年半ぶりに韓国・鬱陵島(ウルルンド)を訪れた。春に訪れた際には、鬱陵島の玄関口にあたる道洞(トドン)港で巨大な太極旗の大看板が出迎えてくれた。それが夏になると、図1のような大看板にすげ替えられていて、正直げんなりした。朝鮮半島図の上方(北東部)が竹島／独島(以下、竹島)と繋がっているのはご愛敬としても、げんなりするのはその右下に記載された言辞である。そこには、「独島を失うと国を失う」とあった。ますます鬱陵島が竹島の属島化していくようである。

筆者は元来、朝鮮半島の政治・外交史研究の中でも、朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)のそれを専門にしているが、「独島を失うと国を失う」という言辞を見て、「당신이 없으면 조국도 없다」(あなたがいなければ祖国もない)という北朝鮮の歌謡を思い出した。北朝鮮において「苦難の行軍」<sup>1</sup>とする時代に盛んに口ずさまれ、北朝鮮では知らぬ人がいないほど有名な歌である。その歌の題名の「あなた」とは故金正日(キムジョンイル)氏を指し、深刻な経済不振と食糧難など、北朝鮮が国難に見舞われていた1990年代中頃から後半にかけて、「사나운 폭풍도」(吹きすさぶ嵐の中でも)金正日氏を中心に困難に打ち克とうとする内容の歌詞を持ち、歌のサビは「당신이 없으면 우리도 없고 당신이 없으면 조국도 없다」(あなたがいなければ我々もなく、あなたがいなければ祖国もない)というものである。かなり切迫した大げさな表現のように思われるが、朝鮮半島

1

北朝鮮で「苦難の行軍」とは、一般的には金日成率いる朝鮮人民革命軍が1938年12月から翌年の3月にかけて、艱難辛苦に打ち克ちながら鴨綠江の国境一帯を踏破した行軍を指す。科学百科事典出版社百科事典編集部『朝鮮大百科事典(簡略本)』平壤・百科事典出版社、2004年、53頁。これに倣い逆境の中で「刻苦奮闘する不屈の革命精神」が1996年から数年間北朝鮮で要求され、鼓舞された。『《労働新聞》、新聞《朝鮮人民軍》、《労働青年》共同社説 赤旗を高く掲げ新年の進軍を力強く進めていこう』『労働新聞』1996年1月1日付。



図1 道洞港に掲げられていた大看板 / 図2 大看板に記載されている「独島を失えば、国を失う」の文字  
出所：いずれも筆者撮影(2015年9月1日)。

2

福原裕二「通底する『朝鮮半島問題』の論理—朝鮮民主主義人民共和国の核兵器開発と竹島／独島」湯山トミ子／宇野重昭編著『アジアからの世界史像の構築—新しいアイデンティティを求めて』東方書店、2014年、294-295頁。

3

池内敏氏はある論考で、「そこを越えることに何らかの規制力が働くような領域を『境界』としておこう。地域に暮らした人々のあいだに生成した『境界』それ自体は『国境(こっきょう)』と同値ではなく、政治権力の関与を介して初めて『境界』は『国境』たりうる」と問題意識的に述べた上で、17世紀から20世紀前半の鬱陵島から隠岐諸島に到る海域を対象に、「『国境』未満の状態から『国境』へと移りゆく過程の分析」を行っている。池内敏「『国境』未満」『日本史研究』630号、2015年2月、4-23頁。このレポートにおける「国境」、「境界」も同様の意味で用いている。

4

鬱陵郡企画監査室企画法務担当編集・企画『第54回鬱陵郡統計年報2014』鬱陵郡、2014年12月、41,49頁。最新版を含む過去10年間の当該統計年報は、鬱陵郡ホームページ：[http://www.ulleung.go.kr/Wooreumoc/page.htm?mnu\\_uid=862#ebookview](http://www.ulleung.go.kr/Wooreumoc/page.htm?mnu_uid=862#ebookview) (2015年12月15日最終アクセス)で閲覧することができる(但し、韓国語)。

5

同上、15,100頁。

の南も北の人びとも同じメンタリティだとすれば、もしかして「独島(ドクト)」は国家と不可分の存在であると信じられていて、それが何らかの喫緊の危機に直面しているのだろうか。そしてその最前線が鬱陵島ということになるのだろうか。

とは言え、筆者が別の論考で指摘したように、鬱陵島におけるこの手の大看板や横断幕は、鬱陵島に住まう人びとが自発的に掲げたというよりも、本土から持ち込まれ掲げられているという色彩が非常に強い<sup>2</sup>。事実、ある地元の官吏は、「(当該大看板の設置について)上が……」と呟いた。韓国において「独島」が愛国や国防の表象物として捉えられていることは日本でもよく知られていることだが、先の言辞には政治権力の介入がここに極まれの感がしてげんなりとしたのであった。

以上はささやかな知見だが、筆者は鬱陵島を訪れるたび、それが「独島」を故意に懐へと抱きつつ、「境界」ないしは「国境」を象徴化する島として形成されていく現況を読み取る。またその象徴の「島」化は、竹島という「境界」を生活圈と考えている鬱陵島の人びとのある種の諦念を孕みつつ進行しているのが特徴的である<sup>3</sup>。小文は、このような問題意識を有しながら行った現地調査の報告である。

## 2. 「国境」未満の鬱陵島

鬱陵島は韓国・ソウルとほぼ同緯度であり、同じくほぼ同緯度にある日本海／東海(以下、日本海)岸の街東海(トンヘ)の東方約160kmに位置している。竹島とは約90km程度離れており、実質的に韓国の人びとが生活を営んでいる場所としては最東端に浮かぶ孤島である。面積は72.86km<sup>2</sup>、人口は2013年度現在で10,662人を数える。人口の1%程度(138人)は、漁業研修で居住するインドネシア国籍者などを中心とした外国人が占め、日本国籍を有する人びとも数名(3人)が居住している<sup>4</sup>。

鬱陵島の現在の主な産業は漁業と観光業だが、漁家(人口)は年々減少傾向にある。ここ数年を見ても、2009年の漁家697戸及び漁家人口1,717人に対し、2013年のそれは555戸、1,268人と急減している。その反対に観光業に携わる人口は増加傾向にある。その背景には、観光客数の漸増があり、2009年の272,555人(うち外国人838人)から2013年の415,180人(うち外国人1,184人)と1.5倍に伸長している<sup>5</sup>。

現勢はこのような状況だが、時代を遡れば、鬱陵島は朝鮮王朝によって15世紀初め頃から19世紀終わり頃まで「空島」政策が敷かれた絶海の孤島であった。その時期を経て、同じく朝鮮王朝が鬱陵島開拓に着手するようになり、1883年4月頃より本土からの鬱陵島入居が始まった。さらにその十数年後

(1890年代中頃)には、伐木と製材を目的に日本人も鬱陵島に定住し始めた<sup>6</sup>。こうして、鬱陵島における朝鮮人と日本人の共棲は、日本による朝鮮半島の植民地支配終焉まで続くことになる。

朝鮮人による鬱陵島入居やその後の日本人の移住時期を前後して、鬱陵島が朝鮮王朝(および大韓帝国)によって明確に「国境」の島であると認知される動きが幾つか見られるようになる。その第一は、1881年5月に朝鮮政府が江原道観察使の報告で、鬱陵島において日本人数名が無断で伐木に従事していることを察知し、翌月にこのことを日本政府に対して抗議したことである。この際、日本政府は鬱陵島が朝鮮領であることを再確認した上で、1883年3月に内務省と地方長官を介して日本人の鬱陵島への渡航上陸を禁ずるとともに(図3)、鬱陵島に在留中の日本人を強制送還させている。第二は、朝鮮王朝が1896年8月にロシアと朝鮮国内の鉱山採掘権とともに鴨緑江流域及び鬱陵島の木材伐採権を譲渡する約定書を締結したことである。ロシア政府はこの約定書を基に、日本駐在のロシア公使を通じて鬱陵島での日本人の盗伐を取り締まるように要請した。これに対して日本政府は、1899年8月に島根県・鳥取県知事に対し鬱陵島での伐木を取り締まるよう通達した<sup>7</sup>。そして第三は、1900年10月に大韓帝国が勅令第41号を発出し、鬱陵島を鬱島に改称して郡に昇格させ、これに伴い従前の島監を廃し郡守とする措置を講じたことである。それでもなお、鬱陵島の「既得権」を図る日本人たちの「度重なる朝鮮政府からの抗議を無視し、日本の国内法にも違反する密出国、盗伐、密輸出入等々」は止むことがなく<sup>8</sup>、その後も鬱陵島への渡航、移住者は増え続けた。ある資料によれば、1900年の日本人越年者は99名、1901年の越年者は350名で、1902年の日本人人口は548名であったという<sup>9</sup>。つまり、当時の鬱陵島は、朝鮮・日本の政治権力の関与が見られる「国境」の島ではあったが、その島を利用する一方の民が双方の規制力を削いで存在するような「境界」未満の状態であった。

その後、鬱陵島は1910年8月の日本による韓国併合によって、大日本帝国の版図に取り込まれ、朝鮮総督府の管轄下に置かれることとなった。しかし、これによって直ちに、行政的に朝鮮総督府の支配が鬱陵島へと及んだ訳ではなかった。少なくとも、1911年5月1日までは従前の朝鮮人郡守・郡書記の陣容で鬱陵郡庁による行政が貫かれた。その後、遅くとも1913年7月1日までは日本人郡書記の登用は見られるものの、朝鮮人郡守が鬱陵郡庁の行政長を引き続き務めていた。そして、1915年5月1日に至って、朝鮮総督府は官制改革を行い、島制を実施して従来郡庁に代わり島庁を置くこととし、警察署長を兼務する日本人島司が行政を預かるようになるのである<sup>10</sup>。

このように、鬱陵島からは韓国併合によりもはや「境界」も「国境」も消え失せたが、鬱陵島は朝鮮総督府の行政上の支配の「時差」あるいは政策が必ずしも貫徹されない状況が存在する別の意味の「境界」の島となった。このことを

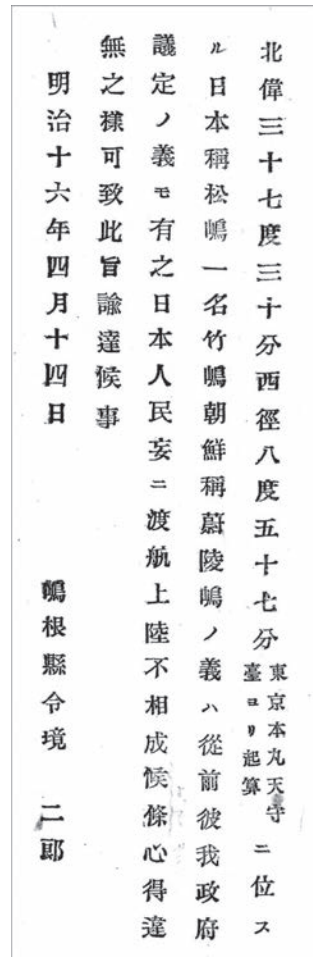


図3 鬱陵島への渡航上陸を禁ずる島根県令の通達(複写)  
出所：島根県総務課総務予算グループ所蔵・竹島関係現有文書の複写物。

6 福原裕二「たけしまに暮らした日本人たち：韓国鬱陵島の近代史」風響社、2013年、10-11頁。

7 内藤正中「竹島(鬱陵島)をめぐる日朝関係史」多賀出版、2000年、132-147頁。

8 同上、145頁。

9 「韓国鬱陵島事情」外務省通商局「通商彙纂」第234号(明治35年10月16日発行)、元眞社、46,50-51頁。当時、日本から鬱陵島へ渡島した多くの人びとは、伐木、漁猟活動の時期を選び滞在した一時居留者であった。したがって、1902年の日本人人口もまた、一時居留者を含む数字であると思われる。

10  
前掲、『鬱陵島に暮らした日本人たち』36-37頁。

11  
同上、24頁。訓令の原出所は、『朝鮮総督府官報』第775号、朝鮮総督官房総務局印刷所、1915年3月6日。

如実に示す次のような傍証もある。鬱陵島はある時期、朝鮮の人びとから産物が豊穡で楽園地の如く見なされていて、このため人口増加が深刻化した。これに対して朝鮮総督府は1915年3月に訓令を発し、「……各官ハ宜シク協同シテ管内住民ニ對シ該島ノ現況ヲ詳示シ移住ノ不利ナルコトヲ曉知セシムルト共ニ苟モ移住ヲ企ツル者アルトキハ懇切説示シテ之ヲ中止セシメ以テ惨害ヲ未然ニ防遏セムコトニ努ムヘシ」とする移住抑制に乗り出した。ところが、その後も朝鮮の人びとの移住を抑制することはできなかったのである<sup>11</sup>。

### 3. 鬱陵島における「国境」の動揺？

1945年8月から9月にかけてのアジア・太平洋戦争における日本の敗戦(8月15日)とこれに基づく降伏文書の調印(9月2日)、そしてアメリカ太平洋陸軍最高司令官マッカーサー布告第1号発出(9月7日)などの一連の動きによって、朝鮮半島は大日本帝国の支配から切り離された。同時に、鬱陵島もまた朝鮮総督府の管轄の手を離れた。ちなみに、鬱陵島からほぼ90km離れた竹島は、植民地朝鮮時代に鬱陵島に居住していた日本人たちによれば、「ランコ島(竹島:筆者注)は当時朝鮮総督府の管轄外であって、従って鬱陵島司の行政管轄権は鬱陵島とその附近に点在する前記属島竹島を含む九つだけであり往時より鬱陵島に住む韓国人も認める所であった」そうだが、1947年8月20日に南朝鮮過渡政府外務処日本課が鬱陵島民に「尋問」したところでは、「独島が鬱陵島の属島だということは、本島開拓当時より島民の周知の事実」だったと、島民間でも食い違いを見せる「境界」であったようである<sup>12</sup>。

12  
同上、42頁。

それはともあれ、鬱陵島は植民地朝鮮からの解放後、約90km先に国境を望む「境界」の島となった。その鬱陵島においてそこで暮らす人びとが「国境」の島であることを意識するようになるのは、恐らく韓国政府が1963年から着手し始めた「鬱陵島総合開発」によってであろう。鬱陵島総合開発は、1962年10月11日の朴正熙国家再建最高会議議長(当時。後に大統領)による鬱陵島視察に始まり、国家再建最高会議外国第506号(1962年10月17日)及び内閣秘第736号(1962年10月20日)によって定められた「鬱陵島総合開発のための技術調査団派遣指示」に基づいて経済企画院により計画が立案され遂行された開発事業である。1963年2月22日に経済企画院長が提出し、同年3月8日に原案可決された「鬱陵島総合開発」と題する文書の「提案理由」には、「外交国防上重要な位置にあり、周囲に豊富な水産資源を保有している鬱陵島の開発事業を長期的で総合的に推進する……」と記されている。また、同文書に添付されている「鬱陵島総合開発計画」と題する文書の「開発の必要性」には、「また本島は国防上前哨地または寄港地としてもとても重要な位置にあり、とくに独島は

外交上特別な対策が要求される」と記載されている<sup>13</sup>。とは言え、鬱陵島綜合開発自体は建設部、農林部、商工部、保社部、交通部、内務部が開発に参画し、港湾、水産物加工施設、電力、上水道、道路、航路標識、保健医療などの整備を行う極めて民生的な開発であった。こと国防に関わるのは、「独島対策」という名目で、「警備員の飲料水解決のために天水貯水及び濾過装置を施設する」に過ぎなかった<sup>14</sup>。

その後、鬱陵島が「国境」の島として転機を迎えるのは2005年のことであろう。韓国の海洋警察庁が島根県議会の竹島の日制定と日本民間団体による竹島上陸の試図を契機に、「竹島警備策を大々的に公開の場で論じ」始めるようになるからである。より正確には、2005年3月22日に海洋警察庁は国会で竹島領海警備強化策を公表した<sup>15</sup>。実際に、筆者が鬱陵島の歴史を調べるためにそこへ赴き始めたのは2005年の夏以降からになるが、初めて訪れた際に現地の人びとから、「最近ではしばしば軍艦を目にするようになった」と聞いたのを記憶している。鬱陵島を訪れた外国人であれば、入島の際に嫌でも海洋警察の人から身分証明書の提示を求められるし、島を巡れば軍用施設を目にすることももある(図4)。

さて、ここからが今年現地で実施した調査の報告となるが、とりわけ夏の訪問時に鬱陵島が「国境」の「島」化していく状況を感じ取ったというのは先に述べた。但し、印象論の範疇だが、2005年夏以降毎年のように鬱陵島を訪れて感じるのは、その時間の流れは緩慢であるということである。どういうことかと言うと、鬱陵島は時々「独島」守護の最前線の地として韓国や日本のマスコミに取り上げられ、「独島」関連施設や軍事施設が建設中あるいは建設予定だと報じられて、事実建設中であったりするが、現地に赴いてみると、建設予定のかかる施設はほぼ竣工予定に間に合ったためしがない。地元の官吏にそのことを尋ねると、返答は決まって同じである。「予算の問題。資材の問題……」、「世論がかまびすしいときには対策が持ち上がり、何らかの施設建設が決定されるが、世論が落ち着くと、建設の熱も冷めてしまう」、果ては「鬱陵島はいつもそんな感じで翻弄されてきたから慣れている。住民はそのことにほとんど関心はなく、生活に直結したインフラの整備を熱望している」という具合である。まるで植民地朝鮮時代の行政的な「時差」を感じさせるとともに、「国境」の島として捉えようとする政府とあくまで生活の場であると考ええる地元住民の落差を思わざるを得ない。

前置きが長くなったが、海軍の軍艦寄港地及び空港の建設予定地として開発が進行する見込みの沙洞(サドン)では、確かにこれらのための防波堤建設が現在の旅客ターミナルを囲むような形で進んでいる(図5)。またその傍らには、軍事施設

13

『鬱陵島綜合開発』(生産機関:総務処議定局議事課、生産年度:1963年)、国家記録院所蔵文書、管理番号:BA0084357。

14

同上。

15

海洋警察庁の竹島警備に関わる議論、実態に関する詳細な検討は、野中健一「韓国・海洋警察庁の竹島警備」『海保大研究報告』第59巻第1号(2014年10月31日)、125-159頁を参照。



図4 鬱陵島内の軍事施設 出所:筆者撮影(2015年8月31日)。



図5 沙洞の東防波堤島瞰図 出所:同上。



図6 沙洞の軍事施設(哨所)の工事概要  
出所: 同上。

としての哨所の建設が進行中である(図6)。防波堤のほうは、昨年2月に着工され、2017年1月に竣工予定である。哨所は昨年11月に着工され、今年中(2015年11月)に完工予定である。



図7 国土の果ての島マスタープラン基本計画図 出所: 筆者撮影(2013年8月2日)。

また、「独島」関連施設の建設状況にも進捗が見られる。鬱陵島北東部に位置する石圃(ソクポ)には、2013年8月現在で図7のような計画図が掲げられていた。この計画図には、「国土の果ての島マスタープラン基本計画図」とあり、「独島義勇守備隊記念館」を中心に、「国立鬱陵島独島自然生態館」、「独島体験館」、「海洋修練館」、「独島ビューカフェ」、「独島ウェルカムハウス」、「独島アトリウム」、「安龍福記念館」などの一連の「独島」関連施設が建設配置される計画であることを伝えている。同時点では早くも、安龍福記念館の建設が進み、外観・内部ともほぼ完成していた。だが、2015年春には一旦開館したものの、展示に不具合があるとして閉館状態であった。夏にはこれが解消され、ようやく入館することができた(図8)。但し、安龍福記念館以外の計画図にある施設の建設はまったく着手されている形跡がない。



図8 安龍福記念館の外観と内部 出所: 筆者撮影(2015年8月31日)。



図9 鬱陵島・独島海洋研究基地  
出所：筆者撮影(2015年4月4日)。



図10 鬱陵守土文化の国造成事業建設地  
出所：筆者撮影(2015年9月1日)。

さらに、鬱陵島北西部に位置する玄圃(ヒョンポ)には、「鬱陵島・独島海洋研究基地」が建設中である。2015年春には本館と付帯施設の「鬱陵島・独島海洋生態館」の一部が完成し、研究員の執務の様子が見られたほか、生態館の完成部分の入場も始まっているようであった(尤も、夏にも完成には漕ぎ着けておらず、状況に変化はなかった。図9)。加えて、かつての鬱陵島の玄関口であった台霞(テハ)<sup>16</sup>では、台霞中学校跡地に来年夏の完工に向けて「鬱陵守土文化の国造成事業」が展開されている(図10)。「守土」(スト)とは国防を意味するほか、まったくの同音である「搜討」も意味するようで、「朝鮮王朝時代の搜討の歴史を加味した護国文化という新たな概念の教育・観光・余暇・文化空間を造成している」と本土から来た現場責任者は話していた。このように、鬱陵島では「独島」を介し、現地住民の包摂も企図しつつ、「国境」の島化が行われている。

他方、鬱陵島を取り囲む隣接の海洋では、「国境」を揺るがすような事態が発生している。それは鬱陵島近海やその北方の北朝鮮海域に大量に出漁している中国漁船の存在である。筆者は2007年夏に鬱陵島を訪れた際に、地元の漁業関係者から「鬱陵島漁業の生命線はスルメイカの漁獲だが、その漁獲が最近落ち込んでいる。なぜなら、回遊魚であるスルメイカは生育期に北朝鮮海域まで北上し、その後鬱陵島付近まで南下してきたところを捕獲するのがベストなのだが、中国漁船が北朝鮮との漁業協定を根拠に北朝鮮海域まで出漁してきて、北上したスルメイカを乱獲するからだ」という話を初めて聞いた。その後、鬱陵島へ行くたびに状況を伺っていたが、事態が悪化しなかったのかそれ以降は中国漁船による被害をあまり聞くことがなくなった。ところが、今春に訪れた際には再び状況が深刻化していると聞かされた。次のような状況であるという。

「3年前くらいからスルメイカは激減していたが、現在はさらに漁獲量が減っていて壊滅状況にある。その原因は、約1,500隻にのぼるとみなされる中国漁船が、北朝鮮の東部海域でスルメイカやフグを乱獲しているせいである。それで、鬱陵島の漁民たちは借金をしつつ生活をするような状況だ。漁業を辞めざるを得ない人びともたくさん目にする。しかし、わが国が関知しない協定に

16

19世紀末の鬱陵島開拓期から約20年間、鬱陵島庁は台霞に置かれていた。その後、朝鮮人・日本人の移住者の増加と偏在により、1903年に道洞へと移設された。

よって中国漁船が出漁しているのであるから、その不満をぶつける所在がない。もとより、中国漁船約1,500隻のうちの約600隻は不許可漁船で、これらいわゆる三無船に対しては、北朝鮮政府も手を焼いているとのことで、中国政府にその統制を再三要望しているそうだが、中国政府も統御ができないらしい。一体どうすればいいのか。さらに、鬱陵島では、避港してきた中国漁船が海洋深層水汲み上げ用のパイプを全部だめにしてしまい、このため鳴り物入りで起業されたミネラルウォーターの会社が倒産の憂き目に遭うという二次被害まで発生している」。

鬱陵島の漁業者たちは「国境」の島であることを逆手にとって、「国境」が侵奪されていると国務総理室などにしばしば陳情に赴いているようだが、「セウォル号事件による海洋警察庁のゴタゴタ」によって対応は遅々として進んでいないそうである。

#### 4. おわりに

鬱陵島は、客観的には「国境」に隣接する島嶼であり、このため韓国政府は外交国防上重要な位置にあるとして開発を進めてきた。これが奏功して、1970年代のある時期には、「韓国で一人当たり所得が一番高い」場所と言われるようになった。その時期には、政府が捉える「国境」隣接の鬱陵島と地元住民のそれとはあまり乖離がなかったのではないか。しかし、10年ほど前の日本の行為のリアクションとして鬱陵島は、政府や道によって生活者である地元住民を半ば置き去りにし、「独島」を介在に「国境」の危機を背負わせる形での島の形成を行っている様相にある。地元住民は「慣れている」と言うが、本当の気持ちはどうなのであろうか。